

簡易隔離床における高品質トマト栽培

第5報 培地管理

吉田耕起・森田敏雅・木場達美
(熊本県農業研究センター)Kouki Yoshida, Toshimasa Morita and Tatsumi Koba :
Production of High Quality Fruit of Tomato on Simple Isolated Bed
5. Soil Amendment

近年、輸入野菜対策として付加価値を求めた高品質トマト生産を検討する産地が多くなった。その中で本研究室では遮根シートを利用した簡易隔離床栽培による高品質トマト栽培技術の確立を検討している。本試験では、複数年にわたり継続して安定的に高品質トマト生産が可能となる培地管理技術を確立するため、ベッド培地への土壌改良資材を追加する必要性の有無、追加する土壌改良材の種類について検討した。

1. 材料および方法

試験は熊本農研センター農産園芸研究所野菜部八代研究室（現い業研究所作付体系研究室）のガラス温室圃場で行った。供試簡易隔離床は、前報までに報告した設備仕様で、45cmおよび30cm幅とした。供試品種は、穂木に‘ハウス桃太郎’および‘桃太郎8’台木に‘がんばる根3号’を用い、2002年8月26日には種、10月17日に定植した。供試した土壌改良材の種類は、バーミキュライト、泥炭、粉碎ヤシ殻とし、施用量は10a当たりで500lとした。栽植様式は、畦幅200cm、株間18cm（1条振り分け：栽植本数278本/a）、直立つるおろし誘引とした。施肥は、灌水同時施肥として、圃試処方0.6~0.8単位を1日当たり100cc~1000cc施用し、2002年12月20日~2003年6月10日に収穫を行った。

2. 結果および考察

1) ベッド幅

30cm区で収量・品質とも優れ、投入した土壌改良材の種類では、30cm区、45cm区とも傾向は変わらなかった。

2) 土壌改良材の種類

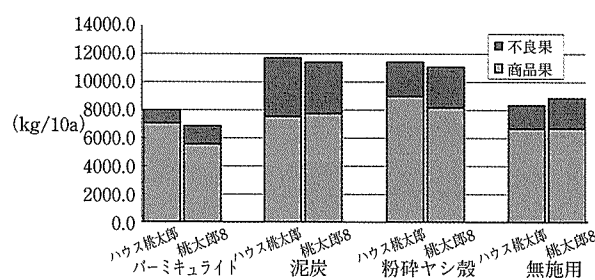
生育：粉碎ヤシ殻区では、各果房下の茎径が安定し、収穫期間を通じて草勢が維持された。

収量：総収量では泥炭区および粉碎ヤシ殻区が多く、商品果収量では、粉碎ヤシ殻区が多くなった。

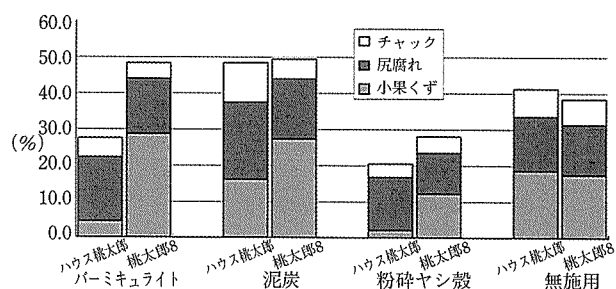
不良果：泥炭区および無施用区が多く、粉碎ヤシ殻区で少なかった。内訳では小果が粉碎ヤシ殻区で少なく、草勢が収穫期間を通じ維持されたためだと考えられた。

糖度：各区とも高糖度を維持し、寡日照期にやや糖度が低下したが、ほぼBrixで7度以上を維持しており、差別化商品となりうると考えられた。

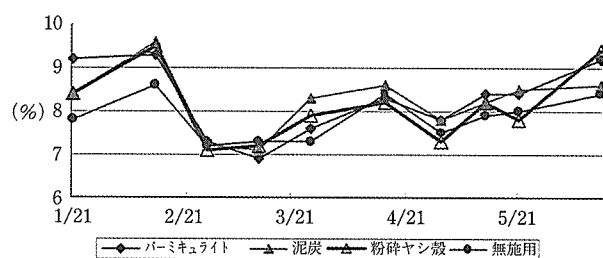
以上の結果から、灌水同時施肥を前提とした簡易隔離床で継続的、安定的に高品質トマトを栽培するためには有機物による土づくりを毎年行うことが必要だと考えられ、その種類としては、低温寡日照期にも草勢が維持できる粉碎ヤシ殻が有望だと考えられた。また、ベッド幅は、他の試験からも30cmが有望である。次年度の試験では、土壌改良材の施用量を検討する。



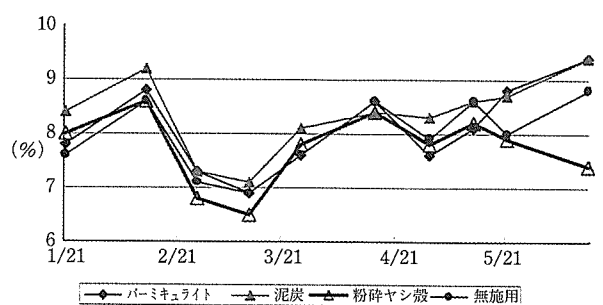
第1図 収量 (重量)



第2図 不良果発生率 (個数)



第3図 糖度の推移 (ハウス桃太郎)



第4図 糖度の推移 (桃太郎8)